

出現環境からみた「あの」の談話機能

— 修復との関わりから —

宮 永 愛 子

(2009年10月6日受理)

The Discourse Function of “*ano*” Viewed from the Environment in which it Appears:
In Relation to Repair Organization

Aiko Miyanaga

Abstract: The purpose of this article is to identify the discourse functions of “*ano*” considered to be filler or hesitation marker. First, using the free conversational data, I specified by the discourse structure and the expressions used with “*ano*”, the environment in which “*ano*” appears. The results revealed that the use of “*ano*” is divided in two groups as follows: 1) “*ano*” which appears when the speakers and hearers deal with problems in understanding the utterance; 2) “*ano*” which appears when the speakers provide the presuppositional information to avoid problems in hearers’ understanding of the utterance. The former is related to the repair organization. From the viewpoint of repair, the latter has a common point with the former, since “*ano*” of both groups appears when the speakers insert the supporting segment for understanding the core segment in conversation. This paper suggests that “*ano*” contributes to marking the boundary between the supporting segments and the core segments.

Key words: “*ano*”, discourse marker, repair, utterance understanding, presuppositional information

キーワード: 「あの」、談話標識、修復、発話理解、前提情報

1. はじめに

会話中に頻出する「あの」は、従来場つなぎ語や言い淀みとして、時には無用なものと考えられてきたが、近年様々な観点から研究が行われ、会話の進行に重要な働きをしていることが指摘されている。例えば、適切な表現形式やモノの名前を検索・作成しているという心的操作を示すものであるとするもの（定延・田窪 1995、田窪・金水 1997）、会話内の様々な局面の導入

を示すものであるとするもの（Cook 1993, Philips 1998）、発話が「受け手に合わせて適切にデザインされているか不確定である」ことを示すものであるとするもの（西阪 1999）、話し手が自分の発想から発話を展開することの前提触れであるとするもの（小出 2006）などである。いずれの研究においても、「あの」によって聞き手が話し手の心的状態や意向を知り、必要に応じて適切に対応することが可能になるため、「あの」は、会話運営を支援するための重要な標識として位置付けられている。これらは非常に示唆に富む研究であるが、未だ解決されていない問題もある。定延・田窪(1995)、田窪・金水(1997)では、考察の対象になっているのが作例であるが、実際の会話での使用において、どの程度説明が可能であるか考察する必要がある。一方、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：大浜るい子（主任指導教員）、町 博光、
深澤清治、白川博之、酒井 弘

実際の会話データに出現した「あの」をその用法ごとに分類した Philips (1998) には、「注意喚起」や「強調」、「フロアの維持」など機能を表示しているように思われるものと、「話者交替の前置き」や「新話題導入」、「修正」、「引用」の前置きといった出現位置と言えるものが混在しており、分類の基準が統一されていないという問題点がある。また、西阪 (1999) の「不確定性にさらされたデザイン」という考え方も、会話における発話というものが言わば常に不確定性にさらされていることを考えると、なぜそれを表示する必要があるのか、西阪 (1999) が挙げている事例を見る限りでは、必ずしも明らかではない。

そこで、本稿は上記の研究をふまえながら、まず、できるだけ「あの」の多様な使用例を観察し、「あの」の使用環境を、共に使用される表現や、談話構成などによって特定することで、「あの」が会話内のどのような局面で使用されているかを整理する。そして、それらの使用環境間に共通点を見つけ出し、「あの」の会話中の働きについて考察する。

2. データと分析対象

本稿で使用した会話データは、東京外国語大学で作成された『BTSによる多言語話し言葉コーパス』に収録されている初対面同士の雑談11会話（録音時間262分）と友人同士の雑談12会話（録音時間240分）である¹⁾。会話参加者はいずれも20代女子学生で、ペアで行われた自然会話である。本資料を選んだのは、話題や会話の方向性が決まっていない自由会話の方が、「あの」の様々な使用例が集められると考えたためである。山根 (2002) では自由な対面会話、講演、電話会話、留守番電話で使用されたフィラーが比較されているが、「あの」の使用割合が最も高かったのは自由な対面会話であったと報告されている。会話は個室にて、ビデオテープ及びMDレコーダーで録音されている。文字化の基準及び記号についての説明は、巻末に示す。この雑談データから数え上げたすべての「あの」（総出現数351例）を分析対象とする。分析対象とする「あの」には、語尾が延びた「あのー」も含むが、指示詞の「あの」²⁾は含まない。

3. 「あの」が出現する環境

上述したように、当該データでは351の「あの」が使用されていたが、それらの中には「あの」と共に使用されている表現や、「あの」に後続する発話内容から、使用環境の特定が比較的容易なものがあつた。それは、

以下に詳述するように、「適切な表現を探す」「補足情報を加える」「より適切な表現で言い換える」「聞き手による対象の同定作業中」の4タイプである。これら4タイプで「あの」の全出現数の6割以上を占めていた。さらに残りの「あの」を、より談話の範囲を広げて観察すると、隣接ペアや行為連鎖といった比較的結びつきの強い連鎖の第一部分と第二部分に挟まれ、第二部分の理解のための知識整備を行っていると思われる場所で「あの」が使用されるという特徴が見られた。このタイプは、全体の約15%を占めていた。ここでは、便宜上、前者の4タイプをグループ1とし、後者のタイプをグループ2とする。表1は、351の「あの」を使用環境別にその出現数を示したものである。表中の「その他」には、分類が困難であったものと、「あの」の直後に会話相手が割り込み、発話が中断したり聞き取り不可になったりしたために出現環境が特定できなかったものを含めた。

表1 使用環境別にみた「あの」の出現数とその割合

グループ	出現環境	出現数 (%)	
1	適切な表現の検索	86 (24.5)	234 (66.7)
	補足情報	83 (23.6)	
	言い換え	39 (11.1)	
	対象の同定	26 (7.4)	
2	知識整備	54 (15.4)	
	その他	63 (17.9)	
	合計	351 (100.0)	

以下ではまず、グループ1の4タイプについて例示、説明した後、これら4タイプに「修復」が関わっていることを示し、次にその観点からグループ2に関連づけ、「あの」の談話機能を提案する。

3.1 グループ1について

(1) 適切な表現を探している環境

まず、351例の内86例（全体の24.5%）に見られたのは、「あれなんだよ」「なんて言うの」「何だっけ」などの表現と共に用いられ（破線部分参照）、適切な言葉を探している環境とまとめることができるものであつた。これは、定延・田窪 (1995) が「あの」は「適切な表現形式やモノの名前を検索、作成しているという心的操作を行っていることを知らせる標識である」と言っているものに最も近い使用であり、Philips (1998) が「適切な表現を探している他のフィラーと共に起し、フロアを維持する働きがある」としているものに相当する（以下の例では、該当部分を下線で示す）。

例1 [友人⑤]³⁾

- 1 A : あ、でも、あたし、これからあれなんだよ。
 2 B : 何？
 3 A : あの、通訳の人たちと(うん)、通訳のあの
 4 一、来週テストみたいな、なんて言うの、
 5 B : はい<はいはい><|<。
 6 A : <通訳>>|> テストみたいなのがあって、

例2 [友人⑫]

- 1 A : 参考文献のところ、あ、参考文献じゃない。
 2 B : 教科書。
 3 A : の(うん)、あの一何て言うんだっけ、あの一
 4 説明んところ、(うん)この言葉って線引いて
 5 <あって>><|<、
 6 B : <あー、そう>>|> そうそう<そう><|<。
 7 A : <後ろ>>|> で参照みたいなやつ。

(2) 補足情報を加える環境

次に多かった(351例中83例:全体の23.6%)のは、直前の発話内容が不十分なため補足情報を加えていると言えるところに現れるものであった。本データでは、「や」や「とか」と共に現れる場合が少なからずあった。例3, 4に見るように、「ちゃんとした」や「何とか」、「どういふ」という曖昧かつ不確定な表現(破線部分参照)の後に「シャワーがついて」や「ルームサービスがついて」あるいは「例えば教育に生かす」という具体的内容が加えられることが特徴である。

例3 [初対面⑩]

(中国のホテルは安いと言われて)

- 1 A : やっぱ、ちゃんとした、ちゃんとしたって
 2 うか、何とかホテルっていうところは高いんで
 3 すよね。
 4 B : そうですね。
 5 A : =あの、シャワーがついて、ルームサービス
 6 がついてっていうところは。
 7 B : は、けっこう<高い…><|<。
 8 A : <けっこう>>|> 高いですね。

例4 [初対面④]

- 1 A : え、それは、えーと、どういう角度から、あの
 2 の、たとえば教育に生かすとか(んー)、ど
 3 ういうことを…
 4 B : 私、そうですね、やっぱり、教育一、に生か
 5 したいっていうのが一番??

(3) より適切な表現で言い換える環境

直前の表現が適切でない判断したり、会話の相手に理解されていないことが分かったりした場合に(破線部分参照)、別の語で言い換える際にも「あの」が使用されており、351例中39例(全体の11.1%)に見られた。本データでは、「ていうか」という表現と共に用いられる例が多かった。例5は、「正式な」というより「オフィシャルな」が適切であると判断された例で、例6は会話相手の聞き返しに対して適切な語彙を示すことができたものと言える。

例5 [初対面②]

- 1 A : できるだけ、正式なっていうか、あのオフィ
 2 シャルな、指導教官は「人名1」先生だって
 3 先輩がいて

例6. [初対面⑦]

- 1 A : なんか、スクーターって30キロが、限界な
 2 んですって。
 3 B : え?
 4 A : 30キロが、あの、制限速度。

(4) 聞き手による対象の同定作業中

最後に挙げるのは、351例中26例(全体の7.4%)に見られたもので、話し手が問題にしている対象を聞き手に同定させる際に、即座に適切な表現が思いつかないために、聞き手自身が「あの」を用いて自身の同定が正しいかどうかを話し手に確認するものである。例7は、Aがインドネシアでジャカルタ出身の学生は、地方出身の学生と話し方が異なるということを述べたことに対して、Bがそれを「方言」と理解してよいのか確認している場面であり、例8は、Aが言及した「ボール」に関して、Bが「料理で使う方の」ボールであると同定したことを確認するものである。

例7 [友人②]

- 1 A : なんかちょっと、語彙が微妙に違うの。
 2 B : へー。
 3 A : 何だろうね、なん、ちょっと、うまく言え
 4 ないんだけど。
 5 B : え、それは、あの方言ってこと?

例8 [初対面⑦]

- 1 A : うちの父も(ええ)、東京の下町出身なんで
 2 すけど(はい)、ボール、あるでしょ、ボー
 3 ル、なんか、
 4 B : ボールってあの…。

- 5 A : =泡立て器, とかの。
 6 B : あーあー。
 7 A : 泡立て【】。
 8 B : **】あの, 料理で使うほうの。**
 9 A : そうそうそうそう。

このタイプの「あの」には、観察範囲を広げたところ、例9のように、話が一段落した後で、話し手が言及したものについて、聞き手が確認するという事例も見られた。

例9 [友人③]

(教育実習で行った養護学校に置いてあったマットを部活で使いたかったという話で)

- 1 A : あたしたち, 去年さ, でマットが, ふっかふ
 2 かなマットが置いてあった<の>|<|。
 3 B : <それは>|>|, 危ないからでしょ。
 4 A : うん。でもね, うち, 部活的に,,
 5 B : 薄いマットなの?
 6 A : うん。厚いマットがほしかったのよ。
 7 B : 借りれば?
 8 A : うん, だからね, “ここで練習させてくださ
 9 い”<って>|<|。
 10 B : <うん>|>|。
 11 A : 言いに行ったの, 去年。
 12 B : うん, どうだった?
 13 A : 断られた, やはり。
 14 B : <笑い>。
 15 A : そう。でもほんとは, “あの, あの体育館で,
 16 あのマットはいいよね”って, (うん)みんな
 17 で話してて。
 18 B : え, **あの高跳び用のマットみたいなマット?**
 19 A : 高跳び用?
 20 B : そうそうそうそうそう。
 21 A : エバーマットっていう…。
 22 B : **あの, もっさもさのでしょ。**
 23 A : ふっかふかの。
 24 B : うんー。緑の?
 25 A : え, 緑?=
 26 B : =緑じゃなかった?
 27 うちの, <小学校の時は>|<| 緑だった。
 28 A : <緑じゃない>|>|。白, 白。
 29 B : 白…。
 30 A : うん。
 31 B : え, **あの体育の, あの, 前回りとかするマッ
 32 トではなくてー。**
 33 A : え, もっと厚いの。なんか, 上からどーんっ

34 て落ちてても, <ポーンって>|<| なるような。

35 B : <あー>|>|。分かる分かる。[小声で]

この例には4つの「あの」が使われているが、これらに導かれる発話はいずれも会話を遡った1行目でAが言及した「ふかふかのマット」を同定するための発話であると言える。Bは、Aが一通り本題(結局そのマットを部活で使えなかったということ)を語った後で、自身の「マット」の同定が正しいかどうかを確認している。

以上挙げた4タイプはいずれも出現環境を判断するための手がかりが明快であり、また本データにおける「あの」の総出現数351例のうち234例(全体の66.7%)がこれらの環境で使用されていたことは重要である。「あの」のようにそれ自体の意味内容が希薄なもの分析には、その使用環境が客観的に同定できることが必要であり、またそれらの環境に使用例が多かったことは、それらの環境での使用が例外的なものではないことを示していると言えるだろう。今仮に、これらの環境を「あの」の典型的な使用環境であると考えれば、この環境の中に「あの」の他の様々な用法を解明するヒントが見つけられるのではないだろうか。

3.2 修復について

上で見た「あの」の4つの出現環境について、そこで行われていることを見ると、話し手が自分の言おうとしていることを相手により正確に理解させようとしていたり、聞き手の方から確認を行ったりして、いずれも正確な理解のための働きかけを行っていることがわかる。このように考えると「あの」が使用されたこれら4タイプの環境は、Schegloff 他(1977), Schegloff(2000)などの「発話を聞いたり、理解したりする際の何らかの問題や困難」への対処、すなわち「修復」が行なわれる場所と関わりがあると言える。ちなみに、Schegloff 他(1977)では会話中の問題として、言い間違い、言葉が見つからないとき、聞き取りや理解が不確かなとき、誤解などが挙げられている。そして、その対処としては、間違いを訂正したり、言葉を探したり、同定したり、繰り返しを求めたり、理解の候補を挙げたり、確認したり、言い換えたりすることが含まれており(Schegloff 他 1977: 362-3)、我々のタイプ1~4がこれらに重なっていることが分かる。ここから、「あの」が会話中の修復に関わっているという可能性が示唆される。

修復に関しては、修復の種類や開始位置など従来の研究で様々な指摘がなされているので、確認しておこう。Schegloff 他(1977)によると、修復には、その開始から完了に至る一連の手続きが含まれ、トラブルの

源 (trouble source) と修復開始 (repair initiation), 修復実行 (repair) の三つの部分から成ると考えられている。修復が開始される場所としては, トラブルの源と同一ターン内, ターン移行区間, 次のターン, 次の次のターンがあると言う (Schegloff 他 1977)。例 1 ~ 8 はいずれもトラブルの源と同一ターン内か, 次のターン, あるいは次の次のターンで修復が開始され, 「あの」が出現しているのは, その修復の開始部分か, 実行部分である。例 9 に関しては, トラブルの源 (1 行目の「ふかふかのマット」への言及) と修復開始(「え, あの高跳び用のマットみたいなマット?」) の位置が離れているため, 一見, 「あの」と修復との関係が認めにくい, このことに関しては, Schegloff (2000) により, 例えば例 9 のように体験談を物語ったり, リストを挙げたりする場面では, 話の腰を折らないように修復の開始が遅れることがあるという指摘がある。

また, 修復の開始と実行については, 話し手自身が問題に気づいて開始する場合 (自己開始), 聞き手が問題のあることを指摘する場合 (他者開始), そして話し手自身が修復を実行する場合 (自己修復), 聞き手の方が実行する場合 (他者修復) が区別されている。例えば, 例 1 と例 6 は相手から「何?」, 「え?」とより正確に説明することを求められ, 話し手が修復を実行している, 他者開始の自己修復である。例 2 ~ 5 は自己開始の自己修復, 例 7 と例 9 は他者開始の他者修復である。例 8 に関しては, 少し複雑であるが, 1 行目で話題に挙げた「ボール」を明確にする必要があると感じた話し手 A は, 修復を開始しようとするが (自己開始), 4 行目で B もその同定を試みており (他者修復), 5 行目で A は, 「泡立て器とかの」と補足的な説明を加え (自己修復), 最終的に, B がその同定に成功し (「あの, 料理で使うほうの」), 修復が完了している。従って, この例では自己と他者が共同で修復を実行している。これらの例を見ると, 「あの」は, 自己修復の場合にも, 他者修復の場合にも出現すると言えよう。

以上, 本データ中の 6 割以上の「あの」が修復の際に出現していたことが明らかになった。以下では, グループ 2 の出現環境についても, この「修復」という観点から, グループ 1 との共通点がないか見ていく。

3.3 グループ 2 について

修復とは, 「会話における何らかの問題や困難に關しての対処を実行すること」 (Schegloff 他 1977) であることは上述したが, これまで見てきた例は, いずれも, 特に発話の理解の上で, 何らかの問題や困難が生じた際に, 会話者が相互に対処していくものであった。つまり, 話し手が言及したことについて, 聞き手

が十分に理解できなかった, あるいは, できない恐れがあると話し手が判断した際に, 話し手がより適切な表現を探したり, 言い換えたり, 補足的に説明を加えたり, あるいは, 聞き手の方から自身の理解を確認するというものであった。すなわち「あの」は, 発話の理解に問題や困難が生じた際に, それに対処するような発話をマークしていたと言える。

「あの」にこのような働きがあると考え, 聞き手の理解に関して, 問題が生じた後で, それに対処するだけでなく, 問題が生じる前に, より聞き手に理解してもらうために, 予め手を打っておくという使われ方も考えられないだろうか。

次に見るグループ 2 は, 以降の発話を聞き手が十分に理解できるように, 予め前提となる情報を与える際に「あの」が出現していたものである。これは, 小出 (2006) が, 「聞き手とのギャップを想定して聞き手の反応を見ながら, 基本的情報を提供する」際に出現しているものに近い使用である。このタイプは本データにおいては, 隣接ペア, あるいは隣接ペアよりも連結関係の弱い「行為連鎖」 (Pomerantz 1978) の間に挿入される事例が多かった。隣接ペアは, 通常, 第一部分が発せられれば, 第二部分の発話のタイプは限定されるので, 聞き手はある予測をもって第二部分を聞くことになる。従って, 発話が一見第二部分から逸脱するように見える場合, 話題が全く別の方向へ展開するのではなく, その発話が, 第二部分を理解するための補助的な部分であることをマークする必要があるのではないだろうか。発話に先立ち「あの」が使用されるのはそのためではないかと考えられる⁴⁾。例 10 は隣接ペア (該当箇所を下線で示す) の第二部分の理解のために必要であろうと思われる情報が, また例 11 は「行為連鎖」 (該当箇所を下線で示す) の後続部分の発話をより正確に理解させるための情報が, 「あの」と共に提示されたものである。

例 10 では, A が, 3 年から編入してきた B に「編入後に多くの単位取得があり, 大変ではないか」という質問をしており, B は, それへの応答を期待されている。応答は, 12 行目の「それほど忙しくない」という部分である。もし, 1 行目の問いに直接こう答えていたとすると, 恐らくその後で, なぜ忙しくないのかという説明 (この場合, 語学単位が免除され, それ以外の単位も前の大学のものが変換されるということ) をすることが求められるだろう。それに相当するのが「あの」で導かれる発話である。B は, 質問に対する答えを相手に納得させるための補助的な説明を, 予め提供していると考えられる。

例10 [初対面⑧]

(Aは1, 2年の時に単位をたくさんとらなければならなくて大変だったという話で)

- 1 A: でも、編入しても、単位いっぱいとなきや
 2 いけないとかくないんですか? <|<
 3 B: <あのー> <|>, 編入の場合は, 単位, 語学単
 4 位 (んー), あの⁵⁾, 1週間6コマあります
 5 よね。あれが全部免除されるんですよ。
 6 A: あ, そうなんですか
 7 B: で, <他の> <|> 【】。
 8 A: 】<いい> <|> ですねー
 9 B: あ, 申し訳ないです> <|> <笑いながら>。
 10 A: <あ, だって> <|> 当たり前ですよ<笑いなが
 11 ら>。
 12 B: あとは, あの, 総合の他の単位とかは, 前
 13 の単位, 大学の単位から変換してればいいん
 14 で,,
 15 A: あー。
 16 B: 別にそこそこで, そこまで, 忙しくないとは,
 17 思うんです。

修復は、本来既になされた発話に問題があり、後から修正や補足情報を加えることであったが、このように、これから述べる本題を相手によりよく理解、納得させるための前提として、予め補足的な情報を加えておくことも修復と同様、重要なことと思われる。

次の例11は、隣接ペアのような強い連鎖関係は認められないが、「ほめ」と「それへの応答」間には行為連鎖（該当箇所を下線で示す）と呼ばれる関係が認められ、その連鎖の間に「あの」が挿入されたものである。

例11 [初対面⑤]

- 1 A: これかわいいよね, この時計。
 2 B: あ, ほんとにー?
 3 A: うん。
 4 B: これはね, いとこのお姉ちゃんのね<笑いなが
 5 ら>, あの結婚式の時に,,
 6 A: うん。
 7 B: 引き出物でね, なんかパンフレットもらった
 8 んだ<笑い>。
 9 A: はいはいはいはい。
 10 B: 最近そういうのらしいね<笑いながら>。
 11 A: うん<うん> <|>
 12 B: <で> <|> なんか, 自分で選んで,,
 13 A: うんうん。
 14 B: こう送ったら (うん), それがくる, みたい
 15 な,,

- 16 A: はいはい。
 17 B: やつで一, なんか, 時計がね, そんななくて
 18 (うん), 時計ほしいなあって思ってたらあつ
 19 て, あじゃあこれ, <みたら来た> <|>。
 20 A: <へー> <|>。
 21 B: でもなんかね, 分かんないんだ。
 22 説明書とか入ってなくてね,,
 23 A: うん。
 24 B: あたしはね, 別に手首太いからいいんだけど
 25 (<笑い>), なんか, これ, これそのまま
 26 さ, なんか, 調節とか, どうやってやるんだ
 27 ろうって, いまだに分かんないんだよね。
 28 A: あ, ほんとだよな。
 29 B: うん。

「ほめ」の応答には「その受け入れ」あるいは「受け入れ回避」が来ることが知られているが、例11では受け入れと回避のいずれをも避けた「ほめの格下げ」(Pomerantz 1978)が選ばれている(21~27行目)。「あの」でマークされた後の発話(5~19行目)はAにその「ほめの格下げ」を納得させるための補助情報であると言えるだろう。この例の場合、「時計のサイズが調節できなくて不便である」ということを納得させるためには、「店で購入したものではなく、カタログで選ぶ形式の引き出物でもらったものである」という幾分複雑な経緯を説明しなければならないからである。この例11の場合も、例10同様、行為連鎖の後続部分が直接先行部分に続いて実現されていたならば、すなわち2行目の発話に直接21~27行目の発話が続いていたならば、Aからは「説明書に書いてないの?」と尋ねられる可能性がある。またそれに対して「説明書が入っていなかった」と答えても、さらに「え, そんな時計をどこで買ったの?」と質問されるだろう。Bはそのようなやりとりを既に予測し、Aにそのような疑問を抱かせないように、前もって必要な情報を提供していると考えられる。本データには、ほめの後に即座に行為連鎖の後続部分が行われるような例12が見られたが、その場合「あの」は出現していなかった。これは、高校生の時にカナダに留学をしたというBをAが「すごいね」と褒めている例であるが、Bは、「(あまりよく考えずに)勢いで行っただけである」と、相手のほめに「格下げ」をしている。

例12 [初対面⑩]

- 1 A: すごいね, 高校生で, そんな。
 2 B: なんか, 勢いで行っちゃったみたいなく2人
 3 で笑い>。

例10にしても、例11にしても、もし、予め前提となる情報提供が行われず、まず隣接ペヤや行為連鎖が実現された場合を考えると、後から聞き手に求められてあるいは話し手が必要性を認めて、理解を促進させるための補足情報を加えたり、話題になった対象の同定作業を行ったりすることになるだろう。その場合、それは修復になる。そのことを考えると、ここで見た予め補助情報を提供する例も修復と同様の機能を果たしていると言えるだろう。例10や例11のように、本題を述べるためには、比較的複雑な説明が必要で、聞き手がすぐに分かってくれない恐れがあるような場合に、このように前提となる情報を予め提供し、相互理解のための知識整備を行っている例が他にも52例（全体の14.8%）見つかった。問題が生じた後で対処するか、生じる前に対処するかには違いがあるが、「あの」が前後の発話の理解を補うような補助的な情報を導入する際に出現しているという点で言えば、グループ1とグループ2には連続性があると言ってよいだろう。

4. まとめ

本稿では、会話において頻出する「あの」がどのような働きをしているのかを明らかにするために、その使用環境を特定することを試みた。その結果、「あの」は、聞き手の発話理解の上で問題が生じた際にその問題への対処、すなわち、「修復」を行う際に、あるいは、問題が起こる前に、聞き手がよりよく理解できるように前提となる情報を与える際に出現していることが明らかになった。このことから、「あの」は、聞き手と話し手の相互理解がスムーズに行われるよう挿入される支援作業に入ることをマークしていると考えられる。言い換えれば「あの」が談話標識として、目下進行中の会話の中心部分とその理解を助ける支援に関わる部分を区別し、会話を構造化することに貢献しているということを示したと言える。

本稿は、定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）が言うような「適切な表現形式やモノの名前を検索、作成している」や西阪（1999）の「受け手に合わせて適切にデザインされているか不確定であることを示す」などの機能を否定するものではなく、むしろこれらの機能がどのような時に必要とされるのかということを明らかにすることができたと考える。会話の相互理解のための支援という環境においては、相手から、明確な説明を求められ、より適切な表現を探さなければならぬことも出てくるであろうし、即座には適切な表現が見つからないが、とりあえずこのような表現で分かってもらえるだろうかという態度（＝相手に対

する不適切なデザイン）で発話がなされることもあろう。支援時には様々な工夫（例示、列挙、喩え、直接引用、など）が行なわれるであろうことを考えると、Cook（1993）やPhilips（1998）の分類もこの枠組みに統合できるのではないかと思われるが、その詳細な検証は今後の課題である。

また、本稿は、初対面と友人同士の女性による二者間の会話に現れた「あの」のみの分析である。従って、男性の会話者によるものや、一人で話し続ける講演あるいは多人数による討論、依頼や助言をする会話など、他の様々な種類の談話データを分析し、本稿で提示した結論がそれらにおいても妥当するか検証する必要がある。また、初対面同士の会話と友人同士の会話では「あの」の出現数も異なっていた。「あの」の働きとこれらの要因がどのように関わっているのか興味深い。さらに、今回のデータでは、会話者によって「あの」を多用する人とほとんど使用しない人がいた。使用に個人的な偏りがあるのか、あるいは「あの」以外に同様の働きをするものがあるのか、この点についても興味深いところであるが、それらについても今後の課題とする。

【データの表記方法について】

本稿の例は、『BTSによる多言語話し言葉コーパス』付属の「基本的な文字化の原則（BTS）」に従ったが、紙幅の関係上、一部改変している。相手の発話に重なる短い小声のあいづちや笑いは、（ ）に入れて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。本稿の例に出てくる記号は以下の通りである。ただし、例文中の下線及び太字は筆者によるものである。

- .. : 発話文の途中で相手の発話が入ったが、前の発話文が終わっていないことを示す
- 【】 : 第一話者の発話文が完結する前に第二話者の発話が始まり、結果的に第一話者の発話を終了したことを示す
- = = : 発話と発話の間が相対的に短いか、全くないことを示す
- < > : 同時発話で、重ねられた発話には、{|<} を、重ねた発話には、{|>} をつける。
- ? : 疑問文
- ?? : 半疑問文

【注】

- 1) 本稿で用いたデータは、宇佐美まゆみ監修（2005）

- 『BTSによる多言語話し言葉コーパス』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報拠点」に収められているものである。
- 2) 会話中には指示詞かどうか判断に迷うものもあったが、ここでは指示詞であることが明確なもののみを除外した。
 - 3) [友人⑤] は、友人同士の5番目の会話を意味する。なお、初対面同士の場合は[初対面⑤]のように表示。A, Bは会話者である。左端に本稿の便宜上の行番号を付した。以下同様。
 - 4) このことに関して、Schiffrin (1987)により、英語の“well”が同様の機能を持つことが指摘されている。
 - 5) 4行目の「あの」に関しては、「語学単位」をよりよく理解させるための補足情報「一週間6コマありますよね」を導いているので、グループ1のタイプ(2)「補足情報を加える」際の「あの」に該当する。

【参考文献】

- Cook, H. M. (1993) Function of the Filler *ano* in Japanese. *Japanese Korean Linguistics*, 3, 19-38.
- 小出慶一(2006)「フィラー「このー」「そのー」「あのー」について：その由来、機能、相互関係」『埼玉大学紀要(教養学部)』第42巻第2号, 15-27.
- 西阪仰(1999)「相互行為の資源としての言いよどみ」好井裕明・山田富秋・西阪仰(編)『会話分析への招待』世界思想社, 71-100.
- Philips, M. K. (1998) *Discourse Markers in Japanese: Connectives, Fillers and Interactional Particles*. Michigan State University.
- Pomerantz, A. (1978) Compliment Responses: Notes on the Co-Operation of Multiple Constraints. In Schenkein, J. (Ed.) *Studies in the Organization of Conversational interaction*. Academic Press, 79-112.
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええっと」と「あの(ー)」—」『言語研究』108, 74-93.
- Schegloff, E., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977) The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, Vol.53(I), 361-382.
- Schegloff, E. (2000) When 'Others' Initiate Repair. *Applied Linguistics*, Vol.21, 204-243.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge University Press.
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』, くらしお出版, 257-280.
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くらしお出版